

# 人 ⑤ ヒスイと巨木に魅せられて

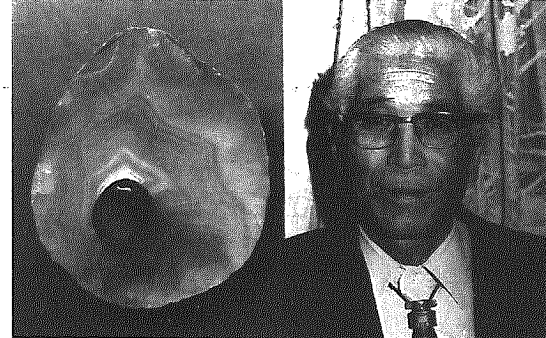
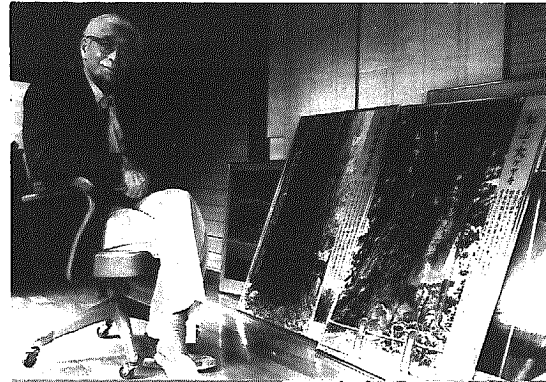
小林茂樹さん  
大岡団地 七十二歳

小林茂樹さんが今月二十三日から二十七日まで県民会館で作品展を開く。ふるさと再発見と題したこの作品展に展示するのは、ヒスイやメノウの原石や宝石類と県内の代表的巨木や古木の写真などである。この少し変わった取り合わせに、小林さんの人生がかい間見える。

「僕は教師をしておりました。昭和二十九年に糸魚川市の小学校に赴任しました。児童が五人しかいない山の分校です。何もない学校で、あるとき校庭を造ろうと思ひ、川原の石を捨ててきました。その中に、ヒスイの原石があったんです」

当時の小林さんは大変な熱血先生だったようだ。新潟日報に「十の瞳の物語」と大きく報道されている。模型の灯台やへびの標本、幻灯機などを自作した。日曜日はヒスイを拾いに行つた。

「そういう話を聞いたんですよ。市長さんに『ヒスイの研究をしてくれんか』と言われたんです。それまで相馬御風先生がしていらつしやつたのですが、じくなくなつてしまいました。それで私に白羽の矢が当たつたのです。ヒスイの



写真上/作品展で展示する写真を見る小林さん 右/昭和12年から49年まで長い教員生活の小林さん。最後は白根市の庄瀬中学校長。左/メノウの台とヒスイの指輪。

指導まで、地元では「ヒスイの先生」と呼ばれた。「石ころ一つで僕の人生は変わった」と笑う。巨木への関心も当時から。「ヒスイを研究すると古代を考えるん

です。で、古代の生き証人は何かと捜すと樹木なんです。地球上で最も長く生命を保っているのは樹木です。県内にも五百年や一千年以上の古木があるんです。写真を撮り始めたのは最近だ。七十になった記念に始めました。三年間に二百株を訪ね百五十株ほど撮りました。一本の木で三回は行きま

## ほんの一冊

田舎暮らしへの招待  
(徳間文庫)  
高橋義夫



近年、田舎がブームだという。山の空き屋が飛ぶように売れ、過疎の廃村が都会人の手により文化村となる。ふるさと宅急便や山間留学が大人気だ。それは大いにけっこうなことなのだろうが、都会人が抱くムラのイメージと本物の村には当然、違いや差がある。それをおもしろおかしく、悲哀やアイロニーを込めて描いたのが、この本。著者は長い間、長野県や山形県で「季節住民」として暮らし「田舎ブームの仕掛人」といわれる(?)人。一読して、これが田舎かと理解する人は都会人、こんなウソだと怒る人は地方人。できたら後者の田舎の人に読んでいただきたい。なお、いづれ著者には「都会暮らしへの招待」を執筆してほしいものだ。(I g)

### 人の動き

項目	現在(前月比)	前年同月比
人口	23,072 (-1)	(+337)
男	11,351 (0)	(+163)
女	11,721 (-1)	(+174)
世帯	6,101 (-3)	(+126)
9月1日~9月31日		
出生	29	41
婚姻	5	64
死亡	8	



秋といえば、食欲の秋、読書の秋、スポーツの秋、芸術の秋、それから天高く馬肥ゆる秋なんてのもあって、とにかく気候が穏やかで外へ出るにもいい季節だ。だから、夏の暑い盛りには涼しくなったあれをやるよ、これもやるよと思えたりする。しかし、あれもこれもと欲するうちに、いつの間にか冬に突入、ということになる。冬という季節は嫌いだ。寒い、寒いとさすがに活動しようという気持ちが鈍ってしまう。特に今年は寒くなるのが早いようだ。▼と、こまごま書いて、去年はどうだったんだろうと考えてみる。思い出せない。日記をつけていないのである。うむ、やはり日記をつけていないのは、▼十月某日。くもり時々雨。今日は寒い、云々。▼しかし、これを一年間は続けたいと役に立たないんだな、と思うとゾツとする。こういう持久戦というのは大の苦手で、三日坊主で終わってしまうんだろな。それに、多分、一番大事なのは日記には書かれないに違いない。日付もな目記の中に刻み込まれ、格別思い出し考えて込んだりすること。そんなことが、個人的には一番大切なことなのだと思うのだ。

来月号は  
高齢化社会や  
福祉を特集します。

今月号の予定でしたが、12月号にさせていただきます。ご意見をお待ちしています。観光を近いうちに取り上げます。

小林茂樹作品展(写真と造形) 11月23日(祝)~27日(日) 午前9時~午後4時 県民会館展示ホールA 無料



昭和六十三年十月日発行毎月日発行  
番号 発行/黒埼町後場 丁二 新潟県西蒲原郡黒埼町大野堂上  
電話/平毛三三三 編集/企画開発担当:広報社 印刷/柳旭光社 経費部六円